

Asian Communication and Collaboration 2012  
司会のことは

<sup>1</sup> 国立感染症研究所 細菌第二部、

<sup>2</sup> National Taiwan University College of Medicine, Taipei, Taiwan

鈴木 里和<sup>1</sup>、Po-Ren Hsueh<sup>2</sup>

近年におけるアジア諸国との活発な人や物の交流は、我が国の経済活動において必要不可欠なものであり、現在の我々の生活はそれら無しには成立し得ない。一方で国際的な輸送網・交通網の飛躍的な発達により、人や物のみならず多くの病原体も瞬く間に多国間にひろまりうる時代である。薬剤耐性菌もその例外ではなく、2010年に大きく報道されたNDM-1産生菌は、主にインド渡航歴のある患者を介してわずか数年の間に世界各地に広まったことで注目された。加えて、薬剤耐性菌については、食肉などの食品を介した伝播経路も指摘されており、食糧の多くを海外からの輸入に頼っている我が国にとって看過できない問題である。

薬剤耐性菌のひろまりは大きくはアジアやヨーロッパと言った大陸レベルで、小さくはそれぞれの国の医療圏レベルで、それぞれに特徴や違いがある。*Acinetobacter* 属等でβ-ラクタム耐性を付与するOXA型β-ラクマーゼや、2000年代以降世界的なひろまりを示しているCTX-M型β-ラクマーゼはアジア、北米、欧州とそれぞれ優位な遺伝子型が異なり、さらにそれらは、おそらくは人と物との交流に伴ってであろうが、経時的に入れ替わるなど等年々変化している。

本シンポジウムでは、各演者の先生方より、薬剤耐性菌の耐性獲得機構や日本、中国、台湾、タイ、バングラデッシュ各国の疫学について最新の情報を提供していただく。薬剤耐性菌の疫学におけるアジア地域の特徴、そしてアジア地域内での国ごとの相違点を議論するなかで、薬剤耐性菌の問題に我々がどのように対峙すべきかを考える事ができれば幸いである。